白髭
きりひさ
仏わら
道成寺
唐船

十九

白鬚

第 君も臣も道直に治まる
國ぞ久しき 抑是は當今に仕へ
奉る臣下也扨も江州白鬚明
神は霊神にて御座候然に
ふしきれば霊夢の御告ましますに
より急き参詣申へきとの宣旨を

蒙りしとて白鬚の明神に勅使に
く手路仕候 九重の空も長閑き
春の色〳〵霞を分けて花の都を
志賀の山越うち過て志賀野の入江
乃道もうちまの浦風にふかれ
だちよる浪も白鬚の宮居に
着にけり〳〵 釣のいとなみ

何とかや浪も浪間のおきの舟を
棹さして来る海士小舟かゝる悪所を
ぞ急がるゝ 風帆を揚て萬里
江天にして江天渺としてもいくへうた
いくあまり遠く見えやうてう
の雨も面白や此しらいへ今の空
霞む浪をまろびて峯白妙に咲花

の風も白まぬ月のきかわ　下哥　暁ーき

漁舟の心迄遠き沖のとも

上哥　光そふひかる山風吹はまきもとく

漕ゆく舟の浪分ゆく程に浦々も

ちらくと霞わたりてあまつかりの

越路の山遠しもあつまぬ気色

ゆく　ワキ詞　いかに是成翁汝は此浦

の者か　シテ詞　さん候此浦の漁夫にて候

あさまたく沖より出釣をたれ候に

唐海を見れは此あたりにて見

別にはぬあなたあまりの都より流

くまなくて渡らせ給ふか　ワキ　定めてよくみる

日本の風俗を見んため今も住へきなき所

君此頃にて聞ぬれは雲の立の

告まし〳〵ひよりの勅使にて候ふては

シテ かゝる難や君としてたよかに神道を尊ひ

給ふ御神の御威光の猶々有難

きれいやしき海士此までも

直成御代にあふみの海のふかき恵ミ

を頼むなり　実さても君を

あふみきいましんもうやまふ心あらはおとう

めくみあつきちかひん　シテ 此叓ちかひ

有かう　たつかされとも経まいらう

白鬚の神の誓ひは今とてもし

かはらぬちきりけにか難や頼もしや

我ら心もおのつから小舟釣の翁なれとおのつから

も安くたの世此附まれあつれい

有難や

クリ 支此国のもとうつ家を

に傳ふる所を委しく尋ねてそれ
きつまうらくありといへども暗き
ある所の一義によらば天地もそこよ
まうさく候だいくのげんごう人壽
二萬歳の時
かせう世尊西天に
出世し給ふときに大聖釋尊其記
きをえて都率天に住し給ふ

我八相成道の後はいまう流布の
地いづれの所にか有べきとて此
あまきんぢうを着く遊行して
御覧じまうにまん〳〵とある大海
の上に一切衆生悉有佛性如來常
住無有變易と波乃音一聲の聲は
ありかはまつくぞその鳴とある

いにしへの大官授現されしどのあり
且又人壽百歳の時釋迦と生れ
給ひて八十年乃春の比頭北面西
右脇臥抜提の浪と消給ひしか
佛ハ常住不滅法界の妙体なれ
ハ昔ありし葉の鳴し所中津
國を遊化し廻る時ハうかやふきあ
へずもせずれ聲るの御代なきハ仏法
乃名字も人志らさりし處に比叡山の
林麓に波や志賀の浦の島邊に釣
をたるゝ老翁ありし尺尊かの翁に向
つて翁もし此地のぬしたらハ此
山を我にあたへよ仏法結界の地
となすへしと宣へハ翁答て申

や我人寿六千歳の初めより此
山の主として此水海乃七度まて
芦原となりしをもまさに見たりし
翁也ただし此地結界の地と成ならは
釣する所失ぬへしと惜しみ
しかは釈尊力なく今は寂光土に
帰らんとし給へは時に東方より浄

瑠璃世界の主医王善逝出給
ひよきかなや釈尊此地に仏法
をひろめ給はん事よ我人寿二万
歳の始めより此所の主なれとも
翁いまた我をしらすなんそ此山を
惜み奉るへきや開闢し給へ我も此
山の主となつて後五百歳の仏

法を守るべしとてさいやくし
給ひし二佛東西より出現の
翁も今は白髭の神とかや　かし
きありとよかへしほど妙なる神秘
とかける翁の其へなあるよ於はつらぬ
今は何をかつゝむべきいまはつゝむも釣
をたれし翁なるが勅使を慰めや

けんとて此宮に参りたり夜更
と雪は天燈龍燈神前に来現の
時節あれば猶々待給へしと
吉
ゆふべの空も立さらずして
落くる風の音羽の浪やよるとくる
釣せし翁とみえつるが秋白髭の神
まて玉のとびらを押ひらき社壇に

入給ひにけり　八しま乃かせひ
残れ色こそよきねり鼓も拝をみてく
舟ぢちひわりきる折からか　舟ぢ
人のうやまひよりく感をまし海
しても身は神の使あつきても
紅あり　かしきや社檀のうち
よりさしく誠ま妙成けれをも出し
神もよつらさおきのまかきのうやまき
渡る白鬚乃舟の兄すまし影わかり
ゆら乃錦乃御事やかつらきさく
よ為つすも唯見君乃こかきさと
感涙袖をうるほきかと　いちく
ゆらいうらひら舞楽れ曲を奏し
つと勅使をあつくゆめ申さめると

上ゲ哥 秘楽さいぜちやうとうやうくばんど
竹のやうをく秘曲をつくし拍子を
うろへて遊楽の舞楽ハ方雖や
シテ 面白や此舞楽の鼓ハよるから
ばうう浪の聲松風鳥聲もさえてく
おん耳をとまし給ふ所にあゆあ
うられ雲井らやきわりことい乃

面鳴動する八天燈龍燈の影現う
や天地の両燈あらはれてく
郡前よりあるは梵の家より山河
草木かへやきわうり目良れきうきつ
〳〵しりきわかくて良もりや明
方のがくて夜もちやあきがくよあれ
ぞよのく明秘よはいと風やがへき

三明神も悦喜とあまそぜんざいく
と盛し給へハ天女ハ舞をまうまう立
ろへきハ龍神ハいのどよかきら
く浪とうくしきとうちて天地よ
わたりてとひ去ゆきハおきゆく雲も
白鬚のく神風治る御代とう
成りしきね

盛久

如何に土屋殿に申へき事乃候
何事にて候ぞ　唯今關東よ
下るおハ是乃限り成へし清水
乃方へ輿をと立て給へ　引払
安き間の事中よ西と東山乃方へ
輿をとられ候へ　南無や大慈

大悲の観世音はさしも草さしも
かしこき誓ひの末一称一念なほ頼もし
ありましてや多年値遇の結
縁空しからんやげにげに頼もしや
いはゞまさに清水寺の花盛　地　ゆる雲
あさみどりの残りの那　音羽滝のもと
とは山　地　鷲の尾とぞ人共るし　地上　見

都をば柳桜をこきまぜて錦と
見ゆる故郷の空ぞまたいつかうと思ひ
の限り成へき東路に思ひ立つ名
残をしき　我もまたかゝる弓馬の家
に生れ世にかくれなき身とて思ひ
ける身の旅行の道関の東におもむき
跡白河を行浪のいつ帰るへき旅ならん

家を離るゝ松はるゝや志賀の宮かたうら
よそのかし是や此ゆくも帰るも
わかれてハしるもしらぬも逢坂の
関寺も今の秋をいかにもいかめし勢田
の長橋うち渡り。音に聞きし鏡山
老の年へぬる身なれば衰へ老曽の
森とふるやそれなりあづまの浦

の夕塩の道とハ渡よかさゝなく安れ
も野へよあるるかいまうい八橋や高師山
く志ほまん坂のりをとれもあるの
橋とて打渡り　猶哀かくきて見えんと
思ひきや命ありきてもさよの中山見
かへるとよ　替るみちを大井河ご
ゆく浪もうつの山　都ても開よ

下
清見が関三保の入海田子の浦打出て
見れハまたつかる雪の富士の根箱根山
明け行くや星月夜鎌倉に着きにけり
けり〱
シテサシ
夢中に道あつて塵埃
を隔つるや浮き世にましき山と
こえ水を渡つて此関東に下つきぬ百
年の栄花は塵中の夢一寸の光陰

氷裏の人を待つや故郷を雲井のよそに
千世とも契りし友人も替る世なれや
我からなりつ鎌倉山の霞に迷ふかく家
身の終りもちかつて我命法をよ
西とおもひしよりおかれをさる
秋かやと思ふらん
平詞
甚痛りや盛久の
独り歩みにわかよや出屋とりまりて

シテ詞
土屋殿とはや此方へ御入候へ
ワキ詞
御下向の由を披露申て候へハ急き誅し申せとの御事にて候
シテ
唯今も獨言に申しことくかくて存命諸人に面をさらさんよりもとく〳〵誅せられさうらはんこそ本望なれハやとの命我ら梅ハ早かれおそかれよ但家朝ハ只今失はれ候へ
ワキ
いや御家

夢ハ此暁ふしきの霊夢を蒙りて仁出されて候
シテ
盛久ハ潜の時節よく存し此程土屋殿の御芳志申も中々愚なり我なからん跡一夜の念仏をも御申向よ頼ミ候ハヽ二世迄の御芳志有へく候
我此年月清水の観世音を信し毎日普門経を読誦申候あり

今日ハ未讀誦申さゞる經に御いと
まを給りて彼御經をと讀誦申し度に
早引れそ有がたき作へ出屋も是ちて
聴聞申しけるふり 此經や大慈
大悲ハ菩薩埵乃忠孝完章亦能精る
菩薩乃直道とうやねらくハ無縁の
慈悲をうれバ我をも導し給へと生れ

利益をしかきつバ後生善所をもたまう
頼まん二世乃願望をし空く哭るの
揺鈎豈虚妄よあらんや或遭王難苦
臨刑欲壽終念彼觀音力とさい刀尋
段〻壊 此經や此經をと聴聞申をい
御命をも頼もしうてうるへ 實
よく此聴聞なりハ此文といつそだとひ

人王鄭の代にあつてこそ善かりし御脱にま
かれ 文宗惹患退散といふ文字を書かれ
矢も年の身をはなましきれは実方の
きしや去年の暮つかた命の為に此
文を誦されけるにあらはれ給ひ諸悪趣地
獄餓鬼畜生老者病死苦悩脱患今滅
此文のことくはなるへくの悪趣をも

三悪道は今うるへしやかう経しとかよ
露の命は惜まねとも後生こそは悲し
きれ 昔在霊山の名は法華一仏
今は西方の弥陀としてそ娑婆示現し給ふ
とも我らか為の観世音三世の利益同
しく刑戮にちうきぬの悲しきは
いつもうくきや国久の終の道よりも

くらかりし頼もしや　堂かつきやず
睡眠のうちにあらたなる霊夢
を蒙りて候いかに忝き御経や候
既八声乃鳥鳴ては寂寞の時節咲
今ありやうやく出させ給へとよ　移まう
きたる事あれはたゞ今金剛の法経
右よりおもひの珠乃緒命もしともと限

あれは是ぞ浮世を出る庭にぞよ
かくと立出る　武士前後をとりかこみ
つゞき是ぞ別乃鳥の声　鐘もき
こゆる東雲に　籠も籠し輿に乗るを
由比乃汀に　急ぎけり　夢路を
出る明ほのやうやく夜の世乃いでありける跡
由比乃汀に着しかば所数を定め

爰は志つ世早ミあかさを給ふへし
盛久やかて座になをり清水乃方ハ
いつくそと西に向ひて観音の御名
を唱へて待居たり　太刀取後ろにま
はりつゝ称名乃聲の下よりも太刀
振揚けれはこはいかに御経乃光眼に
ふさかり取落したる太刀をみれハ二つ

に折れて段ゝとなる、さてもめでたく成
事ゆ覚え　盛久も思ひの外なれハ
たゝ茫然とあきれゐたり　いやく何
とか疑ふへき此程読誦の経乃文
臨刑欲寿終　念彼観音力　刀尋
段ゝ壊乃　経文あらたに白雲の御加き
御恩とはおそれなりけり末世にてハあらう

きり甚か多経乃は経や座て此
由やされは前よし申れきの使
度々申上皇あれハめし出され盛久ハ鎌
倉殿よりまりきりく　御前へ盛久は
前よく君此暁みつきあるは霊夢
れは老者盛久も只今夢やうまれ
ものはるそては　何とかくしよへき

今夜みつきの霊夢を蒙りては
御身は其夢乃やうと御前にて
まつもくやしけれ　盛久は
夫ふれ夢覚乃は御ひとしつて始
あとひてきま久堂れ大悲の寺いつ
不刻乃而あらゆ　盛ける此
定臨も頼ぞ日夜細雲よ急ひは

法華經を修讀をしまどろみわきさ此時
節刑戮よのあさいおを思つゞけ行時
急ろ千手の初夜より後夜
の一点まで蕭然として向ふ方も
しよら云窓はまさ明けるよ耿然る
一天雇明おろうちよ思のひも八月よ
たき給ひぬとみしきせ給ふ老僧の

香染の紫衣をうけ水晶の数珠を
つまぐりつゝ杖よすがりつゝ蝸廊に
たゝしき面影も秋八洛陽東山の
清水のあたりより世の為よ来り
これ本より大慈大悲の誓約あと
ゆうしうかん冷の音成とても秋を
今とる時節の玉疑乃咲くらのつきる人

いかにや世し月ゞ多年の志を抽む
て盛久よ志しうり深く思ひ入
し我世命に替るべしと宣ひし
夢ハ即さあよきう盛久貴くぞ
て觀音の心限りなし　頼朝是を
聞召し御覧のは夢想も同じ告にて
あらたなるは信感ハかきりなし

其時盛久ハ夢のさめぬる思ひして
感涙をとめかね御前を立されハ
めつよ盛久志ありそれば歳をとある
てめさる　程なし　もあるさ盛久か
命ハ千秋萬歳の壽といはひてし
盃を下さるゝ上ハ　時ハ今世そと菊
の酒　花をとうさそう我が　ハ　いりに

盛久ハひさしき平家譜代の侍武
略乃達者ならバ乱舞堪能なれバ
関る及ぶ去る正年小松殿の山にて
て華狩の遊路に御酒宴にもさひて
主馬の盛久一曲一奏にて関東迄
も隠れなし然るに見し候へ折あれバ唯
一門とのば所ちまさり急で侍ふ

かゝる難しきぞうささいハ時も去りからさハ
貴命あり盛久か時節よ参上
世もつくため有へしひびき幽玄
あひ時なまりや一天四海のうちの
人の国まで日乃本のなるこしの春も
此ところ酒宴あるへしまの哭く
暑らぬ日影のさかえて君を祝ふ千秋

かゝる國の松の葉のちりうせずして
正木のかづら長居ハ恐れあり なう
名残はあれとまかりや仕ゞ退
生ける國久の恩の守そゆ〳〵さく

佛原

次第
今ぞこしぢの秋の空〳〵
乃白山尋ん
ワキ詞 是ハ都方より出たる
僧にて候我未白山禅定を仕
らず候ほどに此秋思ひ立白山禅定と志て候
上歌 うやちおくと都乃白山志らぬきうつ
ず行さきの雲もあはの里を行のちそそ

霜紅葉もちりぬれ色こいやたゝき
峯にはやゝ白うつもりてしぐれもこそ
珍しく　急ハ程よ是ハ早加賀の
国仏の原とや説ハゞ目の前にては程
に身を成す堂に立寄り一夜を明さうやと
思ひ候　シテ女詞　なふ〳〵あれなる御僧行
とて其堂にハ泊り候ぞ　ワキ詞　ゆゝき

やかて道よりの宿もなき方より女性一人
来りつゝ我に宿をとりきかずふなど成
人なくましまさんぞ　シテ　是ハ此仏の原
にまします女なるが時々こそあれ今宵
ひしも此宿堂にハ泊りこそ有難さ
機縁なくまし夜ハ思の月を
あまねりば経をよみ佛事をなさく

とひ給へさなきだに五障三従の此身
なれハ求ひの雲も晴かたき心乃水の
濁江をも申して涼しき道ニ導
し給へ御経をよミ仏になるとなきと
取るぞ只れ法出家の身なれ侍る事ハ
へきに老ハ涙にてまし まとそ まうへ
其名をあらハしし古へ仏御前と申し

白拍子ハ此国より出し人也都にのほり
雖女の者まれ世に時めき給ひしが後
にハ故郷なれハとて此国に帰り終に
空しく成なれ跡乃志としも
此草堂の露と消し其跡なり
かしこや梅ハ古への其名によそえし
仏となれハなき跡をもとめて給の

原といふ所も昔よりさる名跡なる
を八「今目のあたり見るも疑ひなき成仏の
縁ある其人の　シテ「名も我もや一佛
成道　ワキ「観見法界　シテ「草木国土悉
皆成仏と聞時は　上哥地「佛の原の草木迄
げに皆成仏はうたがひもなき経や折から
の聲をきよ澄ぐ虫の音迄も聲仏

事とやきこゆらん山風も夜嵐も拂
吹渡る此原の草木も心あるやらんやさしく
ワキ詞「扨々仏の前の御事委く御物語候へ
クリ地「昔平相国の御時妓王妓女佛とて
圓領舞曲花めきて世にも名をえし
遊女有しよ　サシ「始めハ妓王をもてなされ
て遊舞の寵愛さかりしく色香

をかざる玉衣の袖の白露あきみしの
御魔のうちと立さてざれける宿
のうちぞあはれなる　思ひさかりよ揺られ、
く仏前をさらかしよしず出でうつて
いかうよ岐王、出されまつりきく
世を秋風の音さへ深き窓の雨もしきりや
こもるかや思ふ中がかりのかたち、

浮世なれ我は本よりゆうきよくの花
一時の盛あれば散るとあさよと恨みんや
嵐は許せ松は本末どきはあればい
つ難ざらん驚の浮世をと思へば
かりそれ節のあるる数へあはれ
かも未遠ひを照す月る弥陀の御国も
うきさぞこそ頼もしかりきて西山やうきん

世のさかりの奥深き草は庵里は隠家
のかくれきもしと思ふは我思ひの外
ある仏御前の様をかへ来りたまふこは
何を去年の春も引捨る身と成ぬきと
祇王も仏身のうらめしさの執心は猶るに
うらもかゝる心を別人なや今こそ誠の
仏なくもまし西まへて祇王は一年と入合せ

上音 地 感涙を流しけりあはれ　昔かたりは
梅貢ぬ佛今遊をしひ給ふ方もあれ
人や夢ん　シテ 我は頼むかひ岩代の松の葉
世をふる露の身のゆく河と何ふと
地上 行方も行も白雲の跡をみよとは此風の
シテ 草の庵は露あれや　地 露の身なれば
シテ 草堂の あたりは仏ともに云捨て立去

かきハ草衣尾花が袖の露かかる堂の
うちに入りまかりく 松風さびしき汎
原のうぐひすまれかりね乃床とかよ法
をあつらふ我をしらう御跡とつて有難
き 尊き経乃声経やおぎや明
方ふりもあるや隣遠寺の鐘声幽了
ひくき月落かかれ山高き嵐の音も地

かりねの床に夢のさまし給ふあらよ
不思議や我が佛乃空の声よ枕よ遊女の
影乃見えて絵にはめかる様にて仏御前
幽霊となりてましまして説法
あらいかへの仏といわれ名を便
みて輪廻のもうてそ歌業をあはれ
極楽世界れは法の声 仏まちもあし

地 此原乃佛の葉乃妙なる袖
をさ来もあひく気色なり獨なれ
佛の名をぞ尋ね無世とせ乃く
かゝる法の場ぞよ人の法乃
教へもいを雅乃世なや前仏ハを
きぬ後佛ハいまさあり夢ハ
中間ハこの世なれや鐘も
ひゞき鳥をねをなく夜半の
うちなる夢まぼろしの一睡のうち
に仏も有まじきまして人間も
嵐か雲水のごく天に字なる浪
萬一滴の露のいのちをハ何とか世
葉の袖一歩あゆまさ花をとふ
佛のまひとはいかへまれやとらひ

捨くらまいらせけ里をやうらみて捨く
先よき里

道成寺

ワキ 是ハ紀州道成寺の住僧にて候
扨も当寺に於いて去子細ありて
久しく撞鐘退転仕りて候を此程再
興し鐘を鋳させて候今日吉日にて候
程に鐘の供養をいたさはやと存候
いかに能力か　や鐘をハ鐘楼へ上てあるか

ヲカシ
さては早鐘楼へ上て候 今日
鐘の供養をいたさうずるにて有ぞ
又子細ありて女人禁制なるぞかまへて
一人も入まじく候 畏て候

シテ次第
作りし罪も消ぬべく
鐘の供養にまいらん

サシ
是ハ此国のかたほとりに住白拍子にて候 扨も道成寺と申す
寺に鐘の供養あるよし申候ほどに
只今まいらばやと思ひ候 月ハ程なく
入汐の 煙満くる小松原
急ぐ心の程もなく 日高の寺に着にけり

シテカヽル
急候程に日高の寺に着て候 やが
て供養をおがまうずるにて候

シテ
是ハ此国のかたほとりに住白拍子に

て候鐘の供養において舞をまひ
候へし供養を拝ませて給り
候へ
嬉しやさらば舞を
まひ候はうずるやさらはまはん
とてあれにまします宮人の
烏帽子をしばし假に着て既に拍子
をすゝめけり花の外には松ばかり
くれそめて鐘や響くらん
道成の卿承り始て伽藍たちはなの
みちなり興行の寺なればとて道成寺
とは名付けたりや山寺のや春の
夕ぐれ来てみれば入相の鐘
に花ぞ散りける花ぞ散りける
去ほどに寺々の鐘月落鳥啼

く霜天にみちしほほどなくひ
だかの寺の江村の漁火愁に對し
て人々眠ればよき隙ぞと立まい
様にてねらひよりてつかんとせしが
思へば此鐘恨めしやとて龍頭に手をかけ
とぶとぞ見えしひきかづきてぞうせにける
花下 あなおそろしやと ミぬ ワキ詞 言語道斷加様の事

をなほさ／＼女人禁制にて申
て候に曲事にて候ぞ御しく
皆々かゝる謂の候ふ此鐘に付て女人
禁制と申さるゝ謂の候を御存知候か
シテ詞 いや何とも存ぜず候 ワキ 扨は其謂を語
て聞かせ申さうずるにて候 詞 懇に物語候へ
シテ詞 むかし此所にまなごの庄司と

云者ありけり彼者一人乃息女をもつ
こゝに奥よりも熊野へ年詣する
山伏乃有しが法師乃ことを宿坊
と定めけるに彼は前よりきたりぬ法師
娘をも寵愛しけりにある乃客僧こそ
汝が妻よまよあらんと戯しをきされ
心に誠とおもひ年月を送るゞ或夜

彼客僧法師かくとてありしに彼女夜
更人志づまりて後客僧乃閨へゆき
いつ迄かくてハをかくてあらんぞ急
むかへ給へと申しけれバ客僧大きにさはぎ
だましぬようにて逃れし夜に紛れきまし
思出して此寺にあり人に頼み申よう
申しけれバ隠すべき所なけれバ大きな鐘を

せうし其うちに此客僧を隠しをく
かね女ハ山伏を遁まいらせて追かけ
られけれバ折節日高川の水かさ増り
しかバ川の上をかきわけ入けり
遂まはりしかバ一念毒蛇となつて川を
易々と打こえけれハ山伏にげて寺に入り家
りしこを尋しか鐘の有けるを見つけ

中に竜頭をくはへ七まとひ纏ひ焔
を出し尾を以てたゝきけれバ鐘ハ即湯と
成て終に山伏を焼ころしけるとなん
ほろびし其かねもなかりしとぞ　ツレ　言語
道成寺のおこり委しき御物語誌く
なる　ワキ　其時乃女も執心はつきず又
此鐘に障碍をなし給へば我々の

行功しが様の為にて社を涯ひわて
此鐘を二度鐘樓へよりまゐらせて
さむ懸るあまりに
水かへつて日高川原
まさごの数はつくるとも行者の法力尽
べきかと 皆一同に声を上 東方に
降三世明王 南方に軍荼利夜叉
明王 西方に大威徳明王 北方に
金剛夜叉明王 中央に大日大聖不動
ぢうくうさうねうさつくれば曩謨三
曼陀縛日羅南旋多摩訶嚕遮那
娑婆多耶吽多羅吒干鋡聴我説者
得大智恵知我身者即身成仏と
今の蛇身を祈るうへは 何のうらみか
有明のつきかねこそ もよく動く

そ祈ましたくひきやてんてよ千手
乃陀羅尼不動乃慈救の偈明王乃
火焔の黒烟をたてそ祈まるゝいのりの祈
られつゝねつ汗鐘きいてそしら祈とけ
鐘ぞとるとそんこしなおく鐘楼子引
あきゝたりまします蛇体ゞ現まはり
謹請東方青龍清浄謹請西方

白龍謹請中央黄帝黄竜一大
三千大千世界乃恒沙の龍王あはれ
納受哀愍自謹乃只今あきゝいつく
み大蛇のおそろしきよ祈りいのりのこる
をしまうみつよそきあうつ息ら
鐘よ向つて吐息を猛火と成て
まらすやうやく日高まの深淵す

とんてそ入にけるのそミたりぬと験
者達ハわか本坊にそ帰りけり

唐船

ワキ詞
か様に候者ハ九州箱崎の何某
にて候扨も唐土と日本の
船のあらそひあつて日本の舟をハ
唐土に留め唐土の舟をハ日本に
とゝめ置て候某も舟を一艘とゝめ
置て候其舟に祖慶官人と申者

とゝめ置く候ぞや十三年に成
候へ共卑しき牛馬をあまた持て候よ
ば祖慶官人にや付野かひをさせ
候今日も申付うずると存候

一セイ二テ上
もろこし舟の近づく枕夢路をさめざる
これハ 思へ唐土明州の津に
そんし そいうとて兄弟の者なり

抑も我父官人ハさいつ頃日本の賊
船にとらはれ給ひきさて捕はれ九十
三年までも明くれば父の恋し
さて我此世にましまさば今一度対
面申さんと思ひ日も吉日と
舟のともづなときつゝ明州河に
を押わたり海路を漕ゆきて

げにや日本もほのみえて心つくし
の果にある妻と松浦の浪
路かなよゆく猿よなれのなきし
つましぢや箱崎に早く着く
唐土の人のわたりけりや　これに候
祖慶官人未存生にて箱崎殿に
召つかはれまいらせ候よし承り寶

をつみて後国仕るべきためにはる〳〵
今此所に渡りて候　さては祖慶官
人未存生にて候ぞや皆とて
御出候へ猶それに侍ふ御出候へ対面申て
ひき合せ申べし
はうちもちそては　はうは身に侍
めてよあまきある
わらんべども船路乃うちとあけめつて

はやく家路に急へし　かへるわさ
ころもきれ　月に秋のころもあまた
の底　たおやめれだにみも似ぬすの
まされ牛ひく星のかげうすき
秋咲花の野飼こる吾のこころの
なくはなあさき　是ハ唐土明州れ
津に祖慶官人と申者あり我そかう

はるに日本にわたり馬をあつかひ草
かり笛の吹風唐土をいらゐにのそ
みしが是故郷をはしやかくて
年月を送るまにみわらこをまう
くもろこしにも二人の子あるがかれう
事を思ふときハいつれも寒しく又
是もいとはしくおもひかへめ相浮

のがうりん者ありきハ老木の枝ハ空
しくちてこそあれ果ハいかならん あまき
ちとんでよ聖らひれ牛乃拝にみつく子
ゆへよおやはすてらんやちさんや人倫よを
ひてちらや我らすなわちも愚ありく
いざや家路よ帰らんとく めでよ
父でよきてしめを輿ちかへりて唐土

はなち馬をとも桃やらん佐ちかふりんへ
中ちあれやもろこしの花山よハ馬を
ちなし桃林ようしをつなく是ぞ花
の名前世 輿もろこしと日乃本ハ
ざりきの國やらん語ぞへや
愚ありとよ唐土よ背れ本をたとふ
まきしげてきうひつくゆくか牛う

一毛よされとたの異国なりとも
痛はしやさこそ実教くたはしめは
思めいやとよかりくとまかきそ
後はかゝる夜海雲の事も思はすと
上地 まりあはうゆく猶よあさうの音
のもとあきの松原や末よ吹あらん
箱崎おもやく見るはきりしいろた

祖慶官人とて唐へ渡りてかへる
はんは船りよ多き牛馬みちく帰帆
猶よ捕渡て取帰りての むみて
まつは寿ねへきものかくさへ命へきか
見ハ今あうさきとを筑紫行
るかさもあれやよはるかくは
捨たことハ唐土よ二人の子を捨てかへる

シテ「はん子そと二人もちくは（ワレ）きうせを
そむけうとや　シテ「かゝるうき
やおよとて志うハわかくにのわか子なり
よやハ（ワレ）其子もそのかはりを存生
なよーを甲斐なき寶よう人へつきて御
國もへき為にこそ此所にかくては
シテ「是ハ思ひもよらぬおそれのあるか

掛其舟ハいつまちかけ（ワレ）此方へ
来るへあまよりたる舟ならば
寄人乃船ぞ久へ　シテ「実是ハ日本乃
舟なる（ワレ）はかハ對面しける　シテ「阿よ
見若數をも經まて給へ（ワレ）心ちもし
シテ「やあいかにこのまゝ子わか唐土に留め直さる
東子二人・・・・・・
二人乃者（ワレ）はんハわかハなかりき

それなり　是ハ夢か夢ならハ
而ハ覚めな　明やせん　春宵一刻
その價ハ千金も何ならぬ子孫の寶
よもあらじ　諸越ハ寶の多きひとつの
國と申つるに猶のまゝ有なるに
も日本人を隠まいだうとや箱
海の外も知支し終する　めゆよ

やがて追手かかりて急ぎ船よ乗込
いうよ宮殿へやがて追手かかりて
彼よ舟よのまゝやがて御船やがへし
見たてやうそ彼國人へ　あうかかお
しや我まうもつまでもまえ　こうを
出船のあらひてもすく高くあるぞ。
こゝへ来りなん　猶猶度首人へ次のハ

かなしき事此たひさなき者たゞ此所
みくまれけるくは者みくは損よ
何迄も果石つらりみもおゝく有り
此方へまりく悲情あれはるや
風まとあてして乃花たよも同し
程とそてをりうしめ唐紅よ咲あとう
すくもあくを花をちあ情なく社

此へとよ附割うつりくかなあつまり
がうきの御毎よめけまよとぢや織覧と
とくくを呼子もあれれ紅とうる
中みとくまれたづさも
去りの泣給うりがすもうあみるれ川
第婦のうるめし心つくくやたゝへ
もし親れ子やどかゝるすがへ倫よかまうりく嬉

聲のうちによるの鶴がつれりたつか
なかも情子故にこそ思へ况や
我らはあさきたよあにもあらぬ
老乃身の子故によはん命ハ行中よ
行らし空 今終ハとよみかくよ
船みものうまーと海るましや岩ほ
よありて十念しもそようきふれ

さもあらんとの唐土や日本の子ハ
左右よゆかりつきて是をいかにせん
めへばひろ心もよへくと晩ゆくす
うれしき 能とおもどあんするよ
物の哀れを知けるハ木石まことなら
ひ得度出世乃障なればやく眺
とうすうどく 帰国を急く

さし御の事申かきさるゝに更に
神と思はまのは　てうこも何乃うら
うひうや當社八幡も知見ある儀
はうにあるへうらめでたく舟に乗
給へ　是は神の　中にも有難
のはうや神に諸天納受して汝子
を神にあるへ給ふかる難有やらく

餘りまうけよき時刻とうつさん
いざや唐人舟に夜楽をして出さん
悦ひの今や楽をうたふかな子
とも棹のさゝ手も舞の袖打かう
浪の鼓乃かつくよつきて面白や
楽　陸に舞楽をせうしつゝくゞれ乱れ
さしてる海つらきそく心ゆくまゝに

拂ふも追風船は舞乃袖のたし風
も追手をやあらん帆をとりつま
て舟子たちほどをひきつまて舟子た
ちは悦ひいはそてをろそしけてそ
急きゆける

右之本者観世太夫織部
章句眞本令板行畢
正徳六丙申歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再板
皇都二条通御幸町西江入町
山本長兵衛